心《コア》に触れたくて

msk96

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
心（コア）に触れたくて

【Ｎコード】
Ｎ４４７６Ｗ

【作者名】
ｍｓｋ９６

【あらすじ】
才能が集う場所、天秀学園。ここに集まったのは三組の男女。その中の一人筑摩　理工は今日も今日とて幼馴染、親友１とその幼馴染、親友２と後輩、いろいろな仲間たちに囲まれながら研究していく。そんな日常の中で自分にとっての大切な人と結ばれていく……。どうもこんにちは、ｍｓｋ９６です。僕が友人と組んでいるサークル「響色堂」で作った作品です。またその中で僕の友人が作っている音楽の元ネタともなりました。そちらの方は活動報告の方で報告させていただきます。処女作で拙い作品だとは思いますが、どうぞ

暖かい目で見てやってください。よろしくお願いします。

序章

ここは才能あふれし者が集う場所。

しかしそこに集うものたちは才能を多く持とうとも、それ以外はごく普通のどこにでもいる少年たち。

相手のことを理解したくてもしきれなかったり、
自分のことも分からなくなったり、
相手に気持ちを押しつけたり、相手の気持ちを信じられなかったり、
相手に気づいて欲しいと甘えたり、
そんなことはないとすべての可能性を否定したり、

そんな間違いを犯してしまうような少年たちなのだ。

でもだから少年たちは想う。

相手の心（コア）にふれたくて……と。

筑摩理工と藤宮あかり（前書き）

連続投稿です。
序章だけではもはやなにがなんだか分からないと思いますｗｗ
一応ここから本編が始まりとなります。

筑摩理工と藤宮あかり

日本の第二の首都と呼ばれる都市、天秀自治区

天秀自治区は世界の経済の行く末をコントロールすることができるほどの経済力を持っている。
その経済力を支えるのは圧倒的な技術力である。
この都市は世界において最先端といわれる技術の数世代先を行くような技術力を持っている。
その技術力を元に製品を作成するため、天秀自治区内の企業は圧倒的な力を持ち、天秀自治区がその圧倒的な経済力を誇り続けるのである。

しかし、そんな大都市に存在する教育機関はひとつしかない。
それが天秀学園である。
中等部・高等部・大学部の三つから成り、途中編入は絶対に認められず、原則として転校も認められていない。つまり中高大の完全なエスカレーター式の学校である。
そんな天秀学園の高等部校舎から二キロほど地点。そこにあるアパートにはとある少年が春の目覚めを待つかのようにすやすやと眠っている。

筑摩　理工。天秀学園高等部から徒歩約二十五分ほどの位置にあるアパートの一室に住む天秀学園高等部二年生の少年の名前である。
少年の顔立ちは整っている・・・・というほどではないが、まあ多少整っている程度で基本的に凡庸な顔立ちである。
まあしいて言えば女の人のような顔立ちでよくいえば中性的、悪く言えば女の子ぽいともいえる。

体は全体的に細く、そんなに背も低めで顔立ちも先に述べたような感じなので、可愛らしい少年という言い方が理工の外見を表す最も適した言葉であろう。
そんな彼は今ベッドに横になりながらこんこんと眠り続けている。
そんな少年の朝の眠りを妨害するかのようにたたき起す少女がいる。

「理工！さっさと起きなさい！いつまでもだらしなく寝てるんじゃないわよ！」
「ぅん・・・。あ・・・・。おはよう・・・。あかり・・。」
「もう朝ごはんできてるからね！さっさと顔洗って着替えなさい！」
「うん・・・・・・。（ポテン）くー・・・・。」
「寝るな――――！いいから起きなさい！！」
少女はゆさゆさと理工の体をゆするも、理工は決して目を覚まさない。
「ああもう。早く起きなさい！」
それまでよりももっと強く揺さぶるも目を覚まさない。
「こうなったら仕方がない。理工！はーやーくーおーきーなーさーいー！」
理工の上に馬乗りになり、縦にがくがくと理工の体を揺らした。
さすがに揺れが大きくなって寝てられなくなったのか、理工は目を覚ました。
「もうちょっと優しく起こしてくれよ・・・・・。」
理工は眠い目をこすりながら少女にささやかな反抗を試みるが、
「何度起こしても起きないあんたが悪いんでしょうが！」
と取りつく島もなく切り捨てられてしまう。
「いいからさっさと顔洗ってきなさい。朝ごはん食べられるようにしておくから。」
「分かったよ。」
やっとのことで理工は起き上がり扉を開けて外に出た。
少女もそれに続いて部屋を出る。少女が理工を起こすのにかかった

時間は約十分。
これが春も夏も秋も冬も変わらない理工の家の朝だった。

理工をたたき起した少女の名前は藤宮　あかり。
理工と同じく天秀学園に通う二年生である。

わずかに釣り上った強い意志を感じる碧い瞳。
未成熟さを感じさせる卵型の頬。
きれいな桜色の輝きを見せる唇。
自分は高貴なる姫であるということを周りに知らしめるような、一遍の曇りもない黄金の髪。
体つきも幼く小学生と見間違うほどであるが、その幼さもその顔立ちや黄金の髪と一体となり、すべてを魅了するような可憐さと美しさを持つ。
それほどの少女であるからこそ、学園内において『幼き黄金（リトルゴールデン）の姫君』という異名を勝ち得たのである。

だが何故それほどの少女が多少は可愛らしいとはいえ、凡庸にすぎない少年の家で朝ごはんを作ってなどいるのか？
二人は幼少のころからの友人。いわゆる幼馴染であり、理工が天秀学園中等部に入学する際に一人暮らしをしなければならなかったため、同じく天秀学園中等部に入学することになっていたあかりが理工の親に家事を手伝ってあげてほしいと頼まれたからである。

※※※

「おはよー。あかり」

理工が起きてから十分後、理工は洗顔と着替えを済ませ一階へ降りてきた。
「おはよ。ねえ、あんた最近、夜は何時頃寝てるの？最近あんたの寝起きの悪さが目に見えて悪くなってるんだけど。あんたを起こすこっちの身にもなってよね。」
朝の挨拶の後の第一声が叱責だった。
理工はいらぬ世話を掛けている自覚があるのだろう。その顔に申し訳なさをいっぱいに広げ、謝罪をした。
「ごめん・・・。」
「まあいいわ。ただ、あんまり遅くまで起きないようにね。あんたはただでさえ寝ないと体調を崩しやすいんだから。」
「ありがとう。心配してくれるんだね。」
「なっ・・・・。べ、別にあんたの心配してるわけじゃ・・・・・。」
もごもごとどもりながらあかりはその顔を真っ赤にし、それを振り払うかのように大きく顔を振って、
「そ、そそそんなことはどうでもいいから、さっさと朝ごはんをた、食べなさい！遅刻しちゃうでしょ！」
「そうだね。」
理工とあかりは二人で席に着いた。
「「いただきます。」」
二人は声を重ねて食材への感謝の言葉を述べた。

「「ごちそうさまでした」」
二人は声をそろえて食事を終えた。
「じゃあ私は一度家に戻るね。」
「うん。5分後位に階段のところで。」
「また後でね。遅れるんじゃないわよ！」
あかりはそう言い残して玄関を出ていった。

あかりがいなくなって、理工は歯を磨いたり昨日から準備してあったカバンを持ってきたりしているともう5分は過ぎていた。
「よし。そろそろ出るか。」
そして玄関を出て階段のあたりまでくるが、
「遅いわよ。理工。」
「ごめん、ごめん。それじゃあ行こうか。」
「ええ。そうしましょ。」
二人は学園に向かって歩き出した。

筑摩理工と藤宮あかり（後書き）

とりあえず今日のところはこんなところで終わりにします。

ぼちぼち次話を投稿していきます。

よろしくお願いします。

天秀学園（前書き）

理工以外の二人の主人公が登場となります。

天秀学園

二人はアパートから二十分ほどかけ正門の前までたどり着いていた。
「あかり。今日の部活はどうするの？」
「研究の続きに取り掛かるわ。そろそろ、空間圧機構を完成させたいしね。」
などと二人で、今日の予定などについてしゃべりながら昇降口に向かっていると、

ドカンッ！

急に校舎から赤い閃光と共に爆発音が響き渡った。
しかし二人は慌てた風もなく慣れた様子で、
「あー、爆発の位置からして、また化学研かなぁ？」
「たぶんそうでしょ。あそこなんかいっつも変な薬品研究ばっかりしてるし。」
「もう慣れたからいいけど、こういうのは心臓に悪いからいい加減やめてほしいよね。」
「全くよ。あの辺の他の研究部が大迷惑だわ。いくら自動再生建築って言ったって、瞬間的に再生するんじゃないんだから、二・三日は壁が無茶苦茶なままになるじゃない。」
などと言い、いつものこととして考えていた。

天秀学園は天秀自治区にある唯一の教育機関である。
だからこそ自治区側もその設備には大きな力を注いでいる。

その中でも天秀学園高等部は敷地面積が割と広い。
その敷地の大半はグラウンドで占めているものの、校舎の大きさも

中学校舎と比べれば格段に大きい。
しかもその校舎の形も特徴的で、『天』のような形をしている。
校舎を大きく分けると第一校舎・第二校舎・実験棟の三つに分けられる。
第一・第二校舎は教室に使われ、実験棟は主に研究部の活動で使われる。

天秀学園の設備軍の中で最も先端の技術と言えば建物全体に使われている自動再生建築だ。
この自動再生建築というのは、建物そのものが自ら再生活動を行うというもので、今回化学研が建物を破壊してしまったが、この自動再生建築によって二・三日後には完全に修復されている。というようなものである。
「もう再生が始まってるね。」
爆破したところがもうぐずぐずと人間の傷口のように再生が始まっている。
「何回も何回も再生を繰り返してるからじゃない？生命研が生体再生を参考に再生機構を作ったって話しだし、人間の体の怪我がくせになるのと同じだと思うわ。」
「何度見ても思うけどさすがだよなぁ。」
「感心してないでさっさと行くわよ。そろそろ本気で遅刻するわ。」
そう言ってあかりは一人で昇降口に向かって歩き始めてしまう。
「わっ。あかり待ってよー。」
理工はあかりの後を追った。そして二人は学校の昇降口にたどり着いた。
昇降口には監獄を思わせるような鉄扉がいくつもあった。二人はその鉄扉に臆することなく扉を開き中へ入っていく。
実は天秀学園ではこの鉄扉の中で毎朝ひとつの手続きがある。

※※※

鉄扉の中は壁面が薄い緑で背後には入ってきた扉が、正面には校舎に入るための扉があってその上には小さなカメラがある。
「オハヨウゴザイマス。先ホド爆発ガアッタノデ化学研究部ノ付近ヲ歩ク際ニハ、十分ニオ気ヲツケクダサイ。」
人工的に作られたようなカタコトの音声で先程の化学研究部の爆発事件への注意が促された。
「それはさっき見たから知ってるよ。ありがとう。」
「イエ。礼ニハ及ビマセン。ソレデハ正面ノカメラヲ見ナガラアナタノオ名前・所属スルクラス・出席番号ヲ教エテクダサイ。」
「所属クラスは二―A。出席番号二十六番。」
「少々オ待チクダサイ。・・・・・・照合完了シマシタ。出席デス。本日モ一日勉学ニ研究ニ励ンデクダサイ。」
機械音声でそう告げられ、正面の扉が自動で開いた。

※※※

なぜ天秀学園ではわざわざこういうような手続きが必要なのかというと、この学園は全国から集められた天才が集う学園で、多くの生徒がすでに学校の授業の内容をすでに学習しているため授業に参加する意味を持たない。
それが、授業に参加する生徒がほとんどいないという現状に起因している。
学園側も既に理解していることを勉強するよりは、その時間を研究に向けてもらった方がいいと思っているので、日本国における履修問題なども考慮して、テストで然るべき点数を取った人にのみ、朝

登校した時点で出席扱いという方式をとっている。
ただまあ、学園のほぼすべての生徒が満点を普通にとるため、試験どうこうはあってないような制度である。

よって、理工はこれで出席扱いとなり、この後の授業は参加する必要がなくなった。
とはいっても研究部がそれぞれ出席時間というものを定めているため、大体の人は時間通りに登校している。

ただ、いくら授業免除あると言っても例外というものは存在し、その数少ない例外というのが体育である。

体育の意義は、青少年の健全なる身体の発達を促すという点にある。
その意義を考慮すると、どうしても体育の授業をやらないという選択肢はない。
であるからこそ、半ば治外法権の天秀学園において、体育だけが出席義務があるのである。
そして本日の一時間目は体育である。
「さてと、一時間目は体育だから急がなきゃ。」
そう言いながら鉄扉を開けて理工が出てきた。
「理工。」
「うわっ。」
後ろにいたらしいあかりに急に声をかけられたのでびっくりしてしまった。
「何よ。失礼ね。あ、それと今日は情報研も来る日だから、小村君にちゃんと来るように伝えておきなさいよ。」
「分かってる。」
「分かってるならいいわ。それじゃ。」
そう言い残してあかりは研究棟の方へ走っていった。

「朝から二人とも仲がいいことだな。。」
「羨ましい限りだよ。」
「うわーっ！」
突然後ろから現れた二人の友人に理工は飛び上がった。
「うっす。理工。」
「おはよう。理工。」
「おはよう・・・。朝からびっくりさせないでよ。」

最初に挨拶をしてきた奴は大石大介といって、理工のクラスメイトで親友である。
体格はがっちりしていて体育着がぴちぴちで体に張り付いているように見えるほどだ。
義理と人情にあふれた男で、正に漢というにふさわしい奴である。
見た目がかなりがっちりした感じで男らしさがあふれているのでそこそこにモテるのだが、こいつの目には一人の人しか映っていないようで、誰かと付き合うという気配はない。
ただしそれはあかりではないので悪しからず。

二人目の奴は小村次郎といって、これまた理工のクラスメイトにして親友。
学園一のモテ男。学園内にハーレムを建設しているのでは？という噂が流れるほどモテる。
容姿はイケメンなのは当然であるが、チャラついた印象は全くない。むしろ誠実であるということがにじみ出ているようなオーラすらあり、線は細くなく、かといって大介ほどがっちりしているわけでもない。そんな感じで容姿はパーフェクトにイケメンな男である。
それほどまでにイケメンであれば、学園内に男の敵として認知されてしまうかもしれないが、学園内に次郎の敵はいない。モテ男として羨む男は多いが次郎の性格がゆえに決して害悪の感情を持つことはない。

羨ましいことこの上ない。
だからこそ次郎は『至高の王子様（プリンスオブプリンス）』と呼ばれるほど人気があるのだ。
だがしかし、完璧な人間などいないという法則に漏れず、次郎は女好きで女癖が非常に悪い。
それを普段の態度に微塵も出さないのはさすがといえるだろう。
「もう体育始まる時間だけどこんなところで油売っていていいのかい？」
「さっさと着替えて来ねぇとせっかくの出席が遅刻になるぞ。」
「うそ！？もうそんな時間！？すぐ着替えてくる。ちゃんと登校してるって先生に言っておいて！」
理工はそう叫びながら教室に更衣室に向かって走り出した。

天秀学園（後書き）

どうでしたでしょうか？
次郎と大輔の登場シーンでした。
今回は二人の登場話でありましたが、どちらかというと舞台の説明みたいな要素が強いです。
実際説明文が多発で読みにくい部分も多かったと思います。

誤字脱字、文法、話の流れなど、何か思うところがありましたら感想をいただけると嬉しく思います。

よろしくお願いします

ロボ研（前書き）

二人目と三人目のヒロイン登場です。厨二病な機械も登場します。

ロボ研

本日の授業で出席しなければならない科目は体育だけだったので、三人して体育の着替えが終わった時点でロボ研の研究室に行くため研究棟へ向かおうとしたのだが、

「ごめん。ちょっと今日は用事あるからロボ研遅刻する。」

そう次郎が言い、

「スマン。俺もちょっと用事があるから遅刻する。」

大介もそんなことを言いだした。

「二人とも遅刻するのはいいけど、欠席はしないでよ。僕があかりに怒られる。」

「分かった。じゃあ理工が藤宮に怒られないように欠席はしないようにしよう。」

「まあ早めに切り上げて戻ってくるようにするよ。」

「じゃあ、先にロボ研に行ってるよ。絶対に欠席はしないでね。」

理工はそう言って研究棟へ走り去っていった。

「こんにちはー。」

ロボ研の研究室にたどり着いた理工は挨拶と共に研究室の扉を開けた。

「うあー。失敗したー。」

そんな、あかりのがっかりしたような声が出迎えてくれた。

「あかり、どうしたの？」

「私が試しに空間圧制御の実行プログラムを入力してやってみたら、見事に爆発した。」

「何やってんのさ。っていうかそれ研究用の空間圧機構じゃないよね？」

「もちろんよ。馬鹿にしないで。プログラムを組んでみたから部長に頼んで予備の空間圧機構でやらせてもらっただけよ。それよりあんたもさっさと『再生型自動人形』の研究に取り掛かりなさいよ。文化祭は十二月なんだから時間なんてないんだからね！」

『再生型自動人形』と『戦闘装甲』。

これらはロボット研究会が今現在取り組んでいるプロジェクトの中で最も大きな力を注いでいるプロジェクトである。

『再生型自動人形』（Ｒｅｖｅｒｓｅ　Ａｕｔｏｍａｔｉｃ　Ｄｏｌｌ　通称ＲＡＤ）というのは自動再生建築を応用して、再生能力を持ったロボッ

トのことである。このプロジェクトの最大の課題は再生能力の根幹となる再生コアに入力するロボットの組成情報プログラムをどうするかということである。

『戦闘装甲』（ｃｏｍｂａｔ　ａｒｍ　通称ＣＡ）というのは文字通り戦闘において人が白兵戦を行うための超近代兵器のことである。本来これは軍事研が研究すべきことではあるが、使用する機構の大半が専門的な能力が必要とされる上に、この様な研究を好む人間がロボット研究部に多かったためロボット研究部が研究することになった。

そして最初にある程度実用に耐えられるレベルで作られたのが『戦闘装甲試作一号機』（ｃｏｍｂａｔ　ａｒｍ　ｔｒｙ―？通称ＣＡＴ―？）である。

これは通常の人間の能力のおよそ二十倍の力を発揮できるようになっている。しかし熱や衝撃を遮断しきれていないため、近代兵器に対抗しきれるものではなかった。そこで後継機であるＣＡＴ―？に熱や衝撃を遮断するための障壁を生成し熱や衝撃からの防御策とした。

現在の課題はそのプログラムの作成である。

「いや、設計とＡＩはすでに完成させてるよ。後は組成情報のプログラム化だけ。」

「そのプログラムが肝心なんじゃない。それができなきゃ完成できないんだから！」

「まあそれはそうだけど、こっちは次郎もいるし・・・。たぶん完成するよ。むしろそっちの進捗状況はどう？」

そう尋ね返すとあかりはぐっと言葉に詰まってしまった。

「・・・まだまだよ。」

「やっぱり空間圧機構のプログラムは難しいかー。何か手伝えることあったらいってね。」

「分かったわ。」

そんな風に二人でプロジェクトの研究成果を確認し合っていると、

「「こんにちは。」」

明るい人懐っこそうな声とそれとは対照的な平坦で無表情な声が耳に入ってきた。

「どうもー。情報研でーっす。」

「・・・・・。」

最初に入ってきた人懐っこそうな人の名前は可愛　愛美。情報学研究部二年女子である。その身長は高すぎず低すぎずの高さであり、女の子としては通常の高さであるが、その瞳は大きく可愛らしく常に輝いている。

唇は桜色の輝きを放ち、笑顔がすべての人を照らす太陽のように輝いている。これらすべての輝きとその持前の明るさから、愛美は『輝ける姫君(ブライトプリンセス)』と呼ばれる。

続いて入ってきた無口な人の名前は大日向　那美子という。情報学研究部一年女子で、その身長は愛美とほとんど等しい。瞳は切れ長の釣り上った瞳で冷たい意志がそこに込められているようである。

その瞳の冷たさや無口さ、表情のなさなどから『凍れる姫君(アイスプリンス)』と呼ばれる。

『幼き黄金(リトルゴールデン)の姫君』藤宮　あかり・『輝ける姫(ブライトプリンセス)』可愛　愛美・『凍(ア)れる姫君(イスプリンス)』大日向　那美子の三人を合わせて高等部の三大美姫と呼ばれる。

「愛美！那美子ちゃん！久しぶり！」

あかりがすごく楽しそうな声で挨拶を返した。

「あかり！久しぶり！」

「・・・あかり先輩。お久しぶりです。」

基本的に無表情な那美子も心なしか笑顔のように見える。

「今日はプログラムの相談に来てくれたんだよね？」

「うん。こっちの研究成果の報告とそっちの進行状況の報告も兼ねてるけどね。」

ロボット研究部と情報学研究部はロボットのプログラミングの際は協力関係にあり、現在ロボット研究部と情報学研究部が協力しているのがＲＡＤとＣＡのプログラム開発の分野である。でその橋渡し役として選ばれているのが可愛　愛美と大日向　那美子の二名である。

「やあやあ。二人ともよく来てくれた。」

話している三人の元ヘロボ研の部長が歩み寄っていった。

「よろしくお願いします！」

「・・・・どうも。」

「では早速で悪いけどそれぞれのプロジェクトに行ってもらっていいかな？」

「了解です。」

「・・・・・はい。」

二人が担当しているプロジェクトは愛美が『再生型自動人形』を担当し、那美子が『戦闘装甲』を担当している。

二人はそれぞれのプロジェクトのブースへ向かった。

「久しぶり。理工君。」

「久しぶり。可愛さん。」

さすがに中学校のころから同じプロジェクトに携わっているので、二人は結構仲のいい友人だったりする。

「どう？今のプロジェクトの進行状況は？」

「正直に言って、あんまり進んでない。設計とＡＩは今まで作ってきたロボットを参考にすれば良かったからそんなに時間掛からなかったけど、組成情報のプログラムが異常に難しくて全くできない。」

「どういったところが難しい？」

「ロボットの設計情報を余すことなく隅々までプログラム化しなきゃいけないから、その情報量の多さにまず困ってる。」

「どういうこと？情報量が多くてもそれをすべて入力すればいいんじゃないの？」

愛美は怪訝な表情を浮かべ、聞き返してきた。

「そう言うわけにもいかないんだ。建築の設計情報とロボットの設計情報だと実はロボットのほうが細かいところを含めると設計情報が多いんだ。回路とかのこまかな部品の情報もすべて入力しなきゃいけないからね。」

そう、ロボットと建築物では実際の大きさは建築物の方が大きいが、その中に使われている部品すべての設計情報となるとロボットのほうが建築物よりはるかに情報量が多い。

というのも建築物で使われている部品の種類は形状こそ多岐にわたるが、実際そんなに多くはない。だがロボットの場合、ひとつの部品が小さく緻密である上に、数多く使われているしその種類も多い。だから設計情報が必然的に多くなってしまう。

「でも建築研の作ったコアだと建築物を入力するくらいの情報量しか入れられないらしくて、ロボットの情報が入りきらないんだよ。」

「え？じゃあ、まさかコアを自作するの！？」

「そうするしかないんだけど・・・。」

コアの自作についてどうしようと悩んでいるとすぐ近くの扉が開く音がした。

「ちーっす。」

「こんにちわー。」

何らかの用事を済ませてきたらしい次郎と大介が入ってきた。

ロボ研（後書き）

遅くなってすみませんでした。
見る気もないという方もいらっしゃるかもしれませんが、見てくださると幸いです。

部活終了

一方、ＣＡチームの方では、
「どう？出力制御のプログラムの方は上手く出来てる？」
「・・・やっぱり上手く制御できません。どうしても障壁を作ろうとすると出力が許容量を大きく超えてしまって・・・。」
声は少ししょんぼりとしたような感じがあるが、実際のところ表情に大した変化は見られない。
「私もね、さっき少しやってみたんだけど・・・。」
「・・・やっぱりできませんでしたか。」
「障壁の理論の方を見直した方がいいのかなー？」
「・・・どうでしょう。・・・そこまで来ると私は専門外になりますから何とも言えません。」
「うーん。どうしたものかしらねぇ・・・。」
そうやって二人して悩んでいると向こう側のドアが開いた。
「ちーっす。」
「こんにちわー。」
大介と次郎が遅刻してきた。

大介はこちらを見てすでに作業を初めているところを見て、罪悪感を感じたのか少し申し訳なさそうな表情でこちらへ向かってきた。

「スマン。遅刻した。」

「・・・一体どんな理由で遅刻したんですか？」

「まあ・・・、ちょっと・・・な。」

大介は少し気まずそうに言葉を濁した。

「・・・なるほど。何か言いたくない事情があるようですね。ですが遅刻してきたくせにそのような言い訳が通じると思っているのなら、あなたの頭の中身は空っぽか、もしくはその体と同じように筋肉でできているかのどちらかですね。」

すさまじく辛辣な言葉が湯水のように那美子の口から出てきた。

実は那美子はすさまじい毒舌家であり、特に大介に対しては風当たりが強い。

「で、実際遅刻してきた理由は何ですか？」

那美子がいまだに険悪な表情で大介に理由を聞いた。

「う・・・。」

大介の方もその辛辣な言葉と那美子の無言の圧力に耐えきれなかったのだろう。しぶしぶといった様子ではあるが、理由を白状した。

「・・・女の子に告白されてたんだよ。」

「・・・先輩は随分とおモテになりますね。で、その女の子とお付き合いすることにしたんですか？」

那美子は随分と不機嫌そうに言った。

「そんなわけねぇだろ！」

大介が那美子の正面に回り肩を掴んで叫んだ。

「俺が好きなのはお前だけだ！」

部内中に響き渡るような大声で告白した。

しかし、大介は那美子にずっと告白し続けているので部員たちは誰も驚かなかった。

「もうそれはずっと前から何度も聞いてます。離してください。さっさと作業を始めましょう。」

大介から顔を背けて後ろを向いてしまった。

だから大介は全く気付かなかった。

那美子の顔が夕陽のように真っ赤に染まっていたことを。

そのころ次郎たちはというと、

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（怒）。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・（怒）。」

愛美と次郎の二人がすごい形相で睨みあっていた。

二人は幼馴染であるはずなのだが、なぜかものすごく仲が悪い。

二人が互いを想い合っていることも親友である理工たちは理解しているのだが、なぜか二人は出会うたびになぜかこうして喧嘩をする。

険悪なムードの二人にさらされている他の部員たちは正直なところたまったものじゃない。

「「ふんっ！」」

二人はしばらく睨みあった後、首が後ろに回るんじゃないかっていう勢いで顔をそむけ合った。

二人の間の空気があまりにも険悪だあったため理工はどちらにも声をかけることができず、他の部員たちもその険悪さに圧迫され声をかけることができなかった。

そのまましばらく時間が過ぎ、チームがすごく険悪な空気でいると、

「俺が好きなのはお前だけだ！」
大介の叫び声が聞こえてきた。
「大介君が羨ましい・・・。」
愛美が何かをぼそぼそと呟いた。
「ん？何か言った？」
沈黙を耐えかねていた他の部員がは何かをつぶやいた愛美に尋ねた。
「な、なんでもないわ。」
「え、そうなの？別にいいよ。遠慮せずにいいなよ。」
「ほ、本当に何でもないから・・・。」
理工がなおも食い下がろうかとした瞬間。
「ああ！そうだった。」
部長が突如大声を出した。
「部長。どうしたんですか！？」
他のプロジェクトの部員が部長に尋ねた。
「いや、そう言えばこの間の研究部会で軍事研から伝言があったなぁ。と思ってな。」

軍事研――それは軍事研究部と呼ばれる研究部で、軍に関すること全般について研究している。
軍事研の第一の研究対象は軍備、つまり兵器の開発にある。
しかし先にも述べられたが、『戦闘装甲』は本来軍事研で研究されるべきことであるが、軍事研に他の最優先研究事項があったのと、専門知識が多分に必要だったことからロボ研が開発することになったのだ。
だがやはり兵器的な部分も多いので、軍事研とも『戦闘装甲』の開発においては協力関係にある。

「ちょっ、部長なんでそんな大事なことを忘れてたんですか。」

「いやーついうっかり。」

部長は相変わらず軽すぎる人だった。

四月の新年度の部活の時も予算についての報告を全くしなくて、五月になって他の部員が部長に聞いて、「あ、そう言えばそうだったー。忘れてたよー。」っていうくらい軽い人だった。

「えーと。新学期が始まる直前のことらしいんだけど、どうも軍事研の研究成果が盗まれたらしいんだよね。」

部内が一瞬静寂に包まれた。

ええ――――――――!!!!??? ?

部員全員が教室の窓が震えんばかりの大絶叫を上げた。

「ちょっ。みんなしてそんな大声あげないでくれよ。」
部長が両耳を押さえて少し涙目になりながら言った。
「ちょ、ちょっと待ってください。え？それってマジですか？」
『再生型自動人形』の開発チームの部員が部長に聞いた。
「どうも、マジらしいんだよねー。この前研究部会でかなりマジな顔して話してたからさぁ。」
部長は相も変わらずものすごく軽い口調で話し続けていた。
「はぁ。どうして部長はこんなにも軽いんでしょうか……。」
副部長が部長の隣で呆れたように言った。
副部長はいつもいい加減すぎる部長のフォローをしているが、この時は何らかの事情があったらしくいけなかったようである。
「皆さん。今の話を聞いたでしょう。現時点をもって研究成果の保管を最厳重にしてください。」
事態を重く受け止めた副部長が部員全体に研究成果の厳重保存を命じた。
「で、部長。一体何が盗まれたんですか？」
「んーと。何だったかなぁ・・・。」

部長は何だったかを思い出すかのように腕を組みながら悩み始めた。

「忘れちゃった。テヘッ」

ゴン！

「な、何するのさ！」

「いえ。あなたがあまりにいい加減すぎるので少し鉄拳制裁を。」

副部長はあまりにもずさんな部長をつい殴ってしまったようだ。

「この学園で技術を盗み出すということは異常事態だというのに・・・。」

この学園ではどの研究部も研究成果を秘匿することは許されていない。問われれば答えなければならないというシステムになっているため、研究成果を盗み出す意味がないのである。

「私が軍事研に確認をとっておきます。我が部の恥をさらすこととなりますがこの際仕方ありません。皆さんは作業を再開してください。」

副部長はそう言って部室を出ていった。

そうしてしばらくして、ＲＡＤチームは部長の発表の後も険悪なムードが続いていた。

「あ、そう言えば、次郎は何で遅刻したんだ？」

あまりにも険悪なムードが長く続き、その沈黙に耐えきれなかったある部員が次郎に遅刻の理由を聞き出した。

「ん？別に女の子に告白されてただけだよ。」

さすがは学年一の色男。告白されることも日常茶飯事のようだ。

「へーぇ。」

それを聞いた愛美が棘を多分に含んだ言い方で頷いた。

「……なんだよ。」

次郎は愛美の対応に苛っときたのか、かなり険のある対応をした。

「べっつにー。ただ、女の子に告白されて部活を堂々と遅刻してくるなんて言いご身分だなーって思っただけよ。」

愛美の返答が棘しかないような言い方になった。

イライラしすぎて逆に落ちついたのか少し苛ついた表情を落ちつかせ、皮肉っぽい表情で、

「告白の呼び出しを受けておきながらすっぽかして相手を泣かせる奴よりはましさ。」

と、随分人間性に問題のある発言が飛び出してきた。

「さっき指定された場所にいく途中に待ちぼうけ食らってる奴がいたから、事情を聞いてみたらあんたに告白しようとしてるけど、あんたが来ないって泣いてたぜ。」

「だって二度目の告白だったんだもの。私は夏休み前に告白されて振ったのよ。なのに夏休みが始まってすぐにもう一回告白してくるんだもの。少し気味が悪いわ……。」

確かに一月半くらいの間しか空いてないのに連続で告白してくる奴は気味が悪いだろう。

「はん！それは一回目で完全に振っておかないあんたが悪いんだろうが！」

「なによ！私はきちんと振ったわ！」

二人は立ち上がって、完全に喧嘩腰で言い合いを始めそうになってきた。

「ちょっ、ちょっと二人とも落ちついて……。」

理工が二人の間に入ってけんかを何とか止めようとした。

理工が止めに入ったことで口げんかには発展しなかったが、睨みあいになってしまった。二人の睨みあいはしばらく続いたが、二人してその睨みあいが不毛な睨みあいであることに気づいたのか、同時に体ごと背けあった。

この喧嘩でチーム全体の雰囲気がさらに悪くなり、作業はその後全く進むことはなかった。
だがこの時理工は思っていた。
（二人ってなんでこんなに仲が悪いんだろう？幼馴染で中学入ったころくらいのころはこんなに仲悪くなかったのに……。）

「相変わらず二人は仲が悪いな。」
「でもなんかあれって相手が根本から嫌いってわけではなさそうよね。」
「……二人とも相手に対して苛立ってる感じです。」
二人のそれぞれの親友である三人がＣＡチームの喧嘩の様子をＲＡＤの開発ブースから見ていた。
「どうしてあの二人はあんなに仲が悪いんだろうな。」
ＣＡチームの部員がつぶやいた。
「確かにな。あのままだとＲＡＤチームの作業に影響が出ちまうぜ。」
そのつぶやきを聞いた他の部員が応答した。
「うーん。まあそうなんだけどなぁ。二人が上手くかみ合えば絶対に早く完成するはずなんだよ。」

「それにその件については悔しいけれど、私たちが考えることじゃないわ。理工に提案はしておいて理工の判断に任せるのが一番だと思うわ。」

「……私もそう思います。」

「そうか……。」

「さあ、俺たちもさっさと作業に移ろうぜ。」

言い出した部員はなんとなく納得のいったような、いかないような表情を浮かべていた。

あかりは自分でどうにかしてやりたいと思う気持ちがふつふつとわきあがっているのだろう。少し悔しそうな表情だ。

那美子は何一つ表情からはうかがえない。

逆に大介はかなり楽観した様子だった。

（二人は互いを気にしすぎてるから、ああなるんだ。上手く誘導できれば収まるとこに収まるはずさ。）

部活の活動時間の終了時刻になったのでミーティングとなった。

「先程の軍事研の盗難の件について確認をとりました。」

副部長が先程の事件について裏を取ってきたようだ。
「盗難されたのは『雷電放射銃（サンダーバース）』と呼ばれる研究の試作品のようです。
効果は任意の空間に雷を発生させるというようなものようです。
ただそのスペックについては理論値はあるものの、実験を行う前に盗難されたらしく実際のスペックはまだ未計測のようです。」
副部長の報告に部員の全員が静かに耳を傾けていた。
「あと、発射の際には『来たれ。雷電。（コールサンダー）』と唱えることで雷を射出するようです。
実物の写真についてはここに張っておきますから、万が一見つけた人がいたら報告してください。
最後になりましたが、さっきも言った通り全員これから研究成果の保管は厳重にしてください。」
この言葉を最後に二学期最初の部活は終了となった。

部活終了（後書き）

誤字脱字があったら教えてください。

友だちのために（前書き）

次から二章に突入になると思います。

友だちのために

研究棟から昇降口へ向かう途中のこと。
今日は理工と大介と三美姫とで帰ることになった。
理工と那美子と愛美が前を歩いている後ろであかりと大介は二人で話していた。

「ねえ。大石君」

「ん？なんだ？藤宮？」

「愛美たちははこのままでいいのかな？」

次郎は今日告白してきた女の子と付き合うことにしたようだ。

「あー。いいわきゃないんだけどなぁ。正直なところ二人がどうにかしようという気がなきゃどうにもならないと思ってる。」

「小村君がどう思ってるかは私にもわからないけど、少なくとも愛美はどうにかしたいって思ってるわ。」
あかりはそこでいったん言葉を切り、次の言葉を紡ぎ出した。わずかに悲しみをこめて。

「私は今の二人をもう見ていられない。私から見れば二人が互いを想いあっていることなんて一目瞭然よ？なのに二人の行動はそれとはかけ離れた行動をとり続けてる。どうにかしなきゃいけないのよ。そうじゃなきゃ二人は絶対に幸せになんてなれない。」

理工は悔しそうに顔をゆがめながら渦中の人物である前にいる『輝

ける姫（ブライトプリンセス）』を見つめた。

「それは俺も思う。だけどな俺たちが下手に動いたところで確実にこじれるだけだ。少なくとも二人のどちらかが何らかのアクションを起こさない限りはな。」

大介はいつになく真剣な表情で正面を見ながらそう言った。

「だがらどちらかがアクションを起こしたら、その時は全力で助けてやろうぜ。あの二人が幸せになるためにな。」

「そうね。そうするしかないわね。」

二人はそれぞれの親友のために一つの誓いを立てたのだった。

大介と那美子は愛美や理工たちとは別方向なので三人と別れた。

「……先輩。先程はあかり先輩と何を話してらしたんですか。先輩にはあまりにも不似合いな真剣な表情でしたが。」

「不似合いは余計だ。」

那美子は他の二人と話しながらも後ろをうかがっていたようで、話の内容を聞いてきた。

「なあ、可愛と次郎のことはどう思う？」

「……愛美先輩と小村先輩ですか？」

那美子は少し怪訝な声になりながら、その表情は一切変えずに答えてきた。

「私にとってお二人は不思議な存在です。幼馴染でありながら互いの行動一つ一つに苛ついて、怒って、喧嘩して、また苛ついて、というような悪循環を自ら起こしているようにすら見えます。そんなに嫌いならば無視すればいいのにとも思います。」

（やはりあれだけ喧嘩しているとそう見えるか……。）

大介は那美子の答えに納得した。

「……ですが、私はお二人には幸せになってほしいと思います。特に愛美先輩は私の恩師ですから。」

那美子はその時うっすらと微笑みを浮かべた。

大介はその微笑みに見惚れた。

「……で、先輩。その質問が先程のお話と何の関係があるのでしょう？」

那美子に質問され、はっとした大介は、

「那美子！好きだ――――！」

と暗くなり始めた空に向かって叫んだ。

「……先輩。そのようなことを繰り返し言い続けるのは阿呆の極みなうえに不誠実の極みですよ。」

といって大介の方から顔を背けた。

「好きなものは好きなんだ。しょうがねぇだろ。」

「……全く。先輩は本当にどうしようもない阿呆ですね。」

暗くなり始めた今の時間では赤色というのはとても見えづらい。

一方そのころの理工とあかりはというと食事の後片付けの真っ最中だった。

「ねえ。あかり。」

「どうかした？」

「なんで次郎と可愛さんってあんなに仲が悪いのかな？」

あかりは皿を洗っている手を止めた。

先程大介と話していたこともあって少し動揺したのだ。

「どうしたの？急に。」

「いや。今日さ、二人がすごい険悪だったじゃん。二人は幼馴染なのにどうしてあんなに仲が悪いのかなー。って思ってさ。僕らはそんなに仲が悪いわけじゃないし。むしろ仲がいい方だ

と思うけど。」

「確かに、私たちは仲のいい幼馴染だと思うけど、幼馴染にもいろんなタイプがあるだろうし一概には言えないわ。」

「そうかもしれないけど……。あの二人の仲を直したいよ……。」

理工はしょんぼりとした顔で願いを漏らしていた。

「それはそうだけど、あの二人はなるようにしかならないわ。他の人間が下手に手を出したところで複雑になるだけよ。だから理工。あなたがどんなに仲を取り持ちたいと思っても絶対に手を出してはだめよ。あなたは下手したら二人の仲をひっかきまわすだけだから。」

「……なんでって聞きたいところだけど、あかりが言うんだからきっとそうなんだろうな。あかりは僕以上に僕のことを知ってるからね。」

理工がそう言うとあかりは少し照れたのか顔をそらして言った。

「あ、当たり前じゃない。何年あんたの幼馴染やってると思ってんのよ。」

「ふふふ。いつもありがとう。あかり。」

「ふ、ふん！」

あかりは完全にそっぽを向いてしまった。

そのまま会話もないまま二人は皿洗いを続けた。

「ふー。これでやっと終わりね。」

「ありがとう。あかり。」

「これくらい当然のことよ。」

あかりは皿洗いの際につけていたゴム手袋をはずして、リビングに向かおうと歩き出したが、

つるっ。

皿洗いの際に床に跳んでいた水で足を滑らせ後ろに倒れそうになってしまった。

「あかり！」

理工はすぐさまあかりを助けようと、あかりと床の間に滑り込みあかりが床に衝突するのを防いだ。

ちょうどあかりを後ろから抱き締めるような態勢になった。

「あかり、大丈夫！？」

「う、うん。何とか。ありがと。」
「全く。あかりは割とドジなんだから足元にはもっと気を使ってよ。」
「う、うん。ごめん。」
「ん？あかり、どうかした？」
あかりは理工の腕の中で少しもじもじとしていた。
「り、理工。あのね……。」
あかりはますます顔を赤くするものだから理工は本当に大丈夫なのかと心配になってきた。
「ちょっ、あかり、本当に大丈夫？」
「だ、大丈夫よ。ただ……、えっと……。」
あかりは羞恥の頂点にいるかのように顔を朱色に染め上げた。
「理工の手が……、その……、む…、胸に……。」
理工の手は支える際に抱き締めるような格好になってしまったからか、あかりの胸に触れていた。
「ご、ごめん！」
理工はすぐに手を放した。

「べ、別に理工が触りたいなら、い、いいわよ……。」

あかりの最後の方の言葉は完全に消え入るような声だった。

二人の間には気まずい空気が流れ、沈黙が下りた。

理工はその沈黙を払おうと思い、ジョークのつもりである言葉を口にした。

「い、いやー、さっき、触っちゃってたみたいだけど、平坦すぎで全然分からなかったよー。」

静寂があたりを包み込んだ。

あかりは瞬間的に顔を真っ赤にして心の底から叫び出した。

「死ね――――――――――！！！！！」

それと同時に理工は思いっきり頬にこぶしを浴びた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4476w/

心《コア》に触れたくて

2011年10月11日11時14分発行